

G GREEN ニュース

行動する環境アドバイザーの会報

第 99 号 2025

環境アドバイザー連絡協議会

第 13 期代表 井上金治

令和 7 年 1 月 発行

創刊平成 5 年 7 月 16 日



相馬山(榛名山)からの初日の出です。関東平野に登る朝日、朝日に照らされる坂東太郎、激しく変わる現代においても、山頂からの美しい景色は昔から変わりません。いつまでもこの素晴らしい景色がありますように... 今できる一步を一緒に踏み出しましょう！

広報委員長 酒井 義明

群馬県環境アドバイザーの登録状況 (2025 年 1 月 16 日現在)

第 13 期(登録期間: 2024 年 4 月 1 日~2027 年 3 月 31 日)の登録者数は、更新者、新規登録者を含め、合計 329 名です。自然環境部会 184 名、温暖化・エネルギー部会 146 名、ごみ部会 111 名、広報委員会 49 名が登録し活動されています。

【目 次】

- P2 環境政策課からのお知らせ
- P3 作物栽培で地球温暖化防止をめざして
環境アドバイザー視察報告(自然環境部会)
- P4 地域循環型農業見学会報告(温暖化エネルギー部会)
ごみ部会前橋市出前講座
- P5 市民発! 持続可能な地域づくりを
自分事で考えるシンポジウム
- P6 食品ロス削減全国大会 出展報告
第 2 4 回ぐんま環境フェスティバルに参加して
- P7 養蜂と環境
- P8 楽しく学ぶ親子環境教室
上州会議 2024 に参加して
編集後記

群馬県環境情報サイトの URL が変わりました

2023/10/1~



<https://www.pref.gunma.jp/site/eco/>

ECO ぐんまの X (旧ツイッター) をフォローしよう!



地域における環境 SDGs 推進事業の紹介

群馬県 環境森林部 環境政策課 環境政策係

本事業は、「ぐんま 5 つのゼロ宣言」のうち主に温室効果ガス排出量「ゼロ」の実現に向け、県民・企業の環境問題に関する意識の醸成と、地域環境課題解決に向けた行動を促進するため、環境 SDGs（※）のファシリテーターを養成し、ファシリテーターによる県民向け講座や地域・団体のイベント等の実施を通し、幅広く県民や企業に対し環境 SDGs の理念や群馬県が掲げる環境基本計画等に関する考え方について波及させることを目的としたものです。

※環境 SDGs：SDGs の 17 のゴールのうち、特に環境問題や環境保全に関するものに重点をおいたもの。

※事業の詳細や過去の取組についてはこちら → <https://www.pref.gunma.jp/page/182191.html>

次の 3 つの取組を行っていますので、積極的にご参加・ご活用いただきますようお願いいたします。

1. 脱炭素まちづくりカレッジ

本カレッジでは、気候危機や脱炭素の基礎知識を身につけ、持続可能なまちづくりや地域づくりについて学ぶことができるカードゲーム型プログラムです。企業の研修や地域での勉強会等におすすめで、無料でファシリテーターを派遣しますので、ご相談ください。

【プログラム】

- ・気候危機や脱炭素の基礎知識レクチャー
- ・2030 年の温室効果ガス排出量 50%削減にチャレンジするカードゲームの実施
- ・ゲームから得た学びや気づきを共有する対話の時間

【所要時間、人数】

- ・2.5 時間、5 人以上 40 人程度

詳細（県ホームページ）→ <https://www.pref.gunma.jp/page/6799.html>

2. 群馬県版マイ C02 シミュレーター

皆さん、日頃の生活様式においてどれだけ二酸化炭素排出しているかご存じですか？

本アプリ（ダウンロード不要）では、おおよそどれだけの二酸化炭素を排出しているかを簡単に可視化することができ、尚且つ炭素量削減に向けたアクションにつなげるため県平均値と比較考量が可能となっておりますのでお試し下さい。

詳細（県ホームページ）→ <https://www.pref.gunma.jp/page/608876.html>



群馬県版マイ C02 シミュレーター

3. グリーンネイバース群馬

地球にやさしい暮らしを地域で営む隣人たちから学ぶことで地域の脱炭素の輪を広げる、それがグリーンネイバース群馬です。脱炭素というと「エコとかなんだか大変そうでやりたくない」というような声が聞こえますが、群馬県内にも環境にやさしい暮らしをするお隣さんがたくさんいるのです。

そこで、豊かな脱炭素ライフスタイルを楽しむ人たちをゲストに招いて話を聞き、自分と同じ地域での暮らしを知り、できる脱炭素アクションを見つけましょう。次回は 3 月 1 日に県庁 32 階 NETSUGEN で、皆さんも大好きなイチゴを育てる方をお呼びします。参加方法等は改めてお知らせしますのでお楽しみに！

詳細（県ホームページ）→ <https://www.pref.gunma.jp/page/625078.html>（第 1 弾結果）

<https://www.pref.gunma.jp/page/669410.html>（第 2 弾結果）

作物栽培で地球温暖化防止をめざして

副代表（中部地区）松岡三吉

野菜や果物、穀類などの作物を栽培している。作物は夜間も呼吸をしているので二酸化炭素を排出しているが、昼間、光合成で盛んに二酸化炭素を吸収しているので地球温暖化防止に役立っている。特に、ミカン等の柑橘類やオリーブなどの常緑樹、アブラナの仲間、長葱、玉葱、ラッキョウ、ニンニクなどの野菜は冬季でも光合成をしている。

穀類では、以前、知人が持ってきた小麦藁から一握りほどの実を見つけ、これを元に、毎年小麦を栽培している。小麦は冬でも葉をのばし、春には茎をのばす。寒い時期でも光合成をしている。

果物では、ブルーベリーも栽培している。退職後、ブルーベリー教室で知った茨城県の業者から、10種類以上の大粒のブルーベリーの苗を購入し、その農園を直接見学もした。ブルーベリーは施肥等も必要であるが、光合成で二酸化炭素も十分吸収できると甘さ・酸味等のバランスがとれた実ができる。その実を待っている人に今年も届けることができた。

環境アドバイザー視察報告

自然環境部会 常見智之

第1回 10月19日(土)【里山の花畑と崇台山の山】視察 13:30~16:30 (参加者) 総人数 10名+1名

現地は群馬百名山の1つ崇高山(安中)山裾に里山が開け、里山小屋を背に白いアサギマダラのお花畑が広がる様に感動!御主人(櫻田さん)は、朝黒くスリムで健康的、話し方も人懐っこい語りで、苦労話にも情熱が感じられすっかり虜になりました。

30 by 30は既に登録済みでネイチャーポジティブに熱弁、「10年前はここ(谷津田)は、人の手入れがされていまして。このままでは大切な自然が失われてしまう!危機感を抱く地元有志が立ち上がり、里山の再生活動を始めたのです。」崇台山を登りながらの視察は何とも刺激的で興味深く楽しい体験学習でした。



第2回 11月4日(月曜)【サンデンフォレスト】視察 10:15~15:00 (参加者) 総人数 14名+1名



広大な赤城の山裾の傾斜に沿ったローケーション、自然環境と工場が違和感なく整備されている様(※近自然工法)は驚きでした。担当者とコースを辿りながらの丁寧な説明で直にコンセプトを学ぶ事が出来、帰宅後も身体の節々の心地よい疲れが体験学習を思い出させてくれました。

担当者説明「開発には、自然環境と企業活動の共存を目指し、ナチュラリストで作家のCWニコル氏と近自然工法の第一人者・福留脩文先生にご指導頂き、民間では初めての大規模な近自然工法を導入しました。」



地域循環型農業見学会報告

温暖化・エネルギー部会 高橋陽子

令和6年11月24日、埼玉県小川町にある「NPOふうど」が運営するバイオガス施設や小川町堆肥組合の堆肥場、さらに地域の里山、地元の方々が守る江戸時代に造成された溜池などを見学してきました。

NPOふうどは、正式名称を「特定非営利活動法人 小川町風土活用センター」と言い、2002年に設立されたNPO法人です。農家、主婦、会社員など小川町とその周辺地域在住のメンバーが中心となって運営され、会員数は約60名となっています。地域の環境保全やバイオマス利用による農林業の振興と、地域資源を生かした「まちづくり」を目指して活動しています。

バイオガス施設では、町内小中学校の給食残さを使い、「液肥」を生産し、地域生産農家に販売しています。そして、発生するバイオガスを利用して電気を作り出します(現在は運用中止)。また、堆肥場では、草チップ・米ぬか・落ち葉・もみ殻を原料と



《バイオガスプラント》



《堆肥場》

して臭いのほとんどない良質な堆肥を製造して

います。地域の有機資源を循環させる仕組みが、うまく機能していると感じました。その後は、日本農業遺産にもなっている上横田地区灌漑用ため池とその周辺の里山を散策し、地域の自然を満喫してきました。

限りある資源を活用して循環させる仕組みづくりを学ばせて頂き、“古いけれど新しい”地域循環型農業が持続可能な形で、今後も運営されることを期待しています。



《灌漑用ため池》

ごみ部会前橋市出前講座

ごみ部会 西村良子

ごみ部会では、12月11日(水)11:00～前橋市ごみ政策課(ご担当 安藤様 山田様)の出前講座を群馬県庁29階で行いました。



前橋市のごみの現状の一人1日当たりの総排出量は、コロナ期を別として減少傾向にあります。家庭ごみ組成調査の実施では、水分を含む「厨芥(ちゅうかい)類(生ゴミ)の割合が30.0%で一番多く、資源化可能な雑古紙や新聞紙、段ボールなどの「紙類」、プラ容器など「プラスチック類」も多く排出されました。生ゴミの全体写真を見ると売られていたそのままの状態で出されたような物も多く見受けられ、「もったいない」の一言に尽きます。可燃ゴミ全体のう

ち、13.6%は食品ロス!! 驚くばかりです。

実物を見て実際の分別について、説明をいただきました。迷って出さずにいましたが、ほとんどが可燃ごみ扱いとわかり、とても残念でした。防水保存処理(アルミコーティング等)をした飲料紙パックは、すすいで開けば無料で引き取ってくれるお店があります。使い古しの歯ブラシやスポンジなども。富岡市などの公共施設にも回収ボックスが置いてあります。リサイクルにコストがかかるため現状ではやっていないとの説明でしたが、地球環境の良好な維持、



ほとんどが可燃ごみ、残念!

ごみの更なる減量を進めるには、買い物をしたスーパーなどの店頭回収とともに、大いに利用したいと思います。

かなり前ですが、東京都でも 1985 年～1993 年のあいだ、江東区などの一般住宅から回収した生ごみを堆肥化し、足立区などの小松菜の栽培に利用していたことがありました。（「エクセルギーと環境の理論」宿谷昌則著より）化学肥料だけより、野菜の収穫も味も増したそうです。停止になった大きな要因は、一般家庭からの生ごみの分別回収の難しさです。その後の詳細は追えないでいますが、他地域でもやはり、家庭からの生ごみの回収が、一番の困難となっています。我家では、半年ほど段ボールコンポストなどで生ゴミ（草、落葉等）を可燃ゴミに出していません。それだけで可燃ゴミは半分位に減りました。



枝木、もったいない

「公園の一角に枝木や落葉などの堆肥場を設けてはいかがでしょうか。」など、代表の井上先生をはじめ国安氏ほか何人ものアドバイザーから提案がありました。生ゴミや枝木落葉の堆肥化は、資源として生態系に還す持続可能なしくみだと強く思います。

日々の細やかな暮らしから大きな地球環境までも考えて、持続可能な取組みを改めて行動していかなければと思います。貴重な講座を受講でき、新たな活動につなげていきます。ありがとうございました。



市民発！持続可能な地域づくりを自分事で考えるシンポジウム

大泉町 平田綾香



12 月 1 日に環境問題に関する知識と解決のヒントを得ながら、持続可能な地域づくりを自分事として捉え、地域の活動を増やすことを目的としたシンポジウムを大泉町の元気な地域支援事業助成制度を活用し開催致しました。

シンポジウムは、気候変動の専門家である株式会社カーボン RS の小松代表取締役による環境問題の現状と将来、そして世界での先進的な取り組みについての基調講演と、地域で環境保全活動を行う 3 団体と元群馬県地球温暖化防止活動推進センター センター長中島啓治先生を解説者に迎えパネルディスカッ

ションを行いました。

開催地の大泉町以外の住民の方や、議員や行政など様々な立場の方より広く足を運び頂き、「メディア等で聞きできない内容で勉強になった。」「気候変動に関する世界レベルの状況、問題、課題、対策などの詳細を知ることが出来た。またその課題を地域に落とし込んで、その地に合った具体的な対策の一面を教えてもらった。もっともっと多くの人に聞いて欲しい内容であった。」「群馬のゴミ問題は、真剣に自分事として考えていきたい。日々の暮らしを見直したい。」「地球環境問題の対応は、多くの人の協力が必要であると理解した。」などの感想を頂きました。

今後も継続的に地域に情報を伝え、地域全体で環境問題に取り組んでいけるきっかけづくりが出来たらと思います。



食品ロス削減全国大会 出展報告

太田市 古屋すみれ、柴田康徳

2024年11月30日に群馬県主催の「食品ロス削減全国大会」がGメッセ群馬で開催され、県の内外から多くの関係者が集った。

食品ロス削減からみた子ども食堂の役割とローカルSDGsをテーマに桐生市を拠点とする「あいおい子ども食堂」として出展をする機会を頂き、食品ロス削減を実現しながら子育て世帯を支援する活動を具体的な事例を紹介するブース展示を行った。

あいおい子ども食堂では、地域のスーパーや地元農家と連携することで、余剰食材を地域の子育て家庭に分配し、1回の活動で約150kgの食品ロス削減を実現している。子ども食堂の果たす役割のエッセンスは「集約と分配」であり、地域内のスーパーや地元農家から余剰食材、未出荷農産物を引き取り、いったん子ども食堂にて集約し後、それらを配布世帯数に応じて分けることで、利用者は異なる種類の食材を少しずつ受け取れるwin-winの関係が成立する。

出展ブースでは多くの県内外からの来場者が訪れ、予想を超えた関心の高さに驚いた。多くの質問を頂いたが、集約すると次の3点になる。1、余剰食材があるがどこにどのような形で提供できるかわからない。2、余剰食材があるが取りに来てもらうのは難しいようで、輸送をどうしたら良いか。3、継続して支援したいと思っているがどのように始めたら良いか。個々の状況はそれぞれ異なるが共通して言えることは「地域密着」型の運用がローカルSDGsの視点からも重要であり、長続きするコツであること。提供者と子ども食堂が同じ地域でうまくマッチングできると、提供側が「無理をしない」で続きやすく、双方で移動輸送の負荷を減らすとともに、輸送によるCO2排出量の抑制、企業の地域貢献といったテーマとの親和性も高い。一方、利用者は子ども食堂を通じて地元農家さんから不格好だけど獲れたての「トゲトゲのついたきゅうり、プリプリのナス」を含めて色々な食材をまとめて受け取ることが出来る。

食品ロス削減は、削減量といった数値目標に注目されがちだが、今回の出展で実感したことは、食品ロスの削減を数値目標と捉えるだけでなく、「誰かの役に立っていないか」を模索している企業、団体が多いことであり、一子ども食堂の運営委員として大変嬉しい発見であった。今後も子ども食堂がローカルSDGsの視点からも支援の輪がさらに広がっていくことを期待したい。



第24回ぐんま環境フェスティバルに参加して

副代表（吾妻地区・草津町）反町忠雄

ぐんま環境フェスティバルが11月16日（土）10:00~15:00に開催されました。

群馬県庁1階県民ホール（南側）では20の団体が展示を、県民広場では7の団体が展示を、広場ステージではG-FIVEが環境寸劇を行い、約800名の来場者がありました。群馬県環境アドバイザー連絡協議会も展示ブースを作り、展示パネルにポスターを掲示し、環境アドバイザーについて、温暖化・エ





エネルギー部会、自然環境部会、ごみ部会、広報委員会の活動を紹介しました。テーブルでは、『大人も楽しい食品ロス削減クイズ』を行い、参加者には落ち葉腐葉土で育てた野菜苗サニーレタス苗を手作り新聞エコバックに入れ参加賞として渡しました。

私は今年度から環境アドバイザーに登録したばかりで、展示活動に参加したのは初めてでした。9時に会場に着くと諸先輩方が会場準備を終わらせていました。大変だったのは、参加賞の苗を入れる手作り新聞エコバック作りです。

ごみ部会で下準備をした部品に持ち手を糊付けし完成させました。みんなでやった作業は楽しく出来ました。来場者へのクイズや説明もみんなで楽しく出来たと思います。環境フェスティバルでの経験を自分の活動の参考にしたいと思います。



養蜂と環境

渋川市 養蜂家 岩崎恵子



巣枠に一杯の花粉

ミツバチは季節ごとに様々な花粉を集め、「花粉団子 (bee pollen)」を足につけ持ち帰り、それを巣箱内で発酵させて「蜂パン (beebread)」を作ります。花粉は主にミツバチの幼虫の餌として用いられ、栄養価が高く、蜜蜂の子育てに欠かせません。その花粉団子は色とりどりです。

私は都内、宇都宮での子育てを経て10年前に渋川市の小野上地区へ家族とUターンしました。棚田のある里山です。数年前、父から譲渡されたミツバチの飼育を始めて以来、また夫が環境ファシリテーターとして活動していることもあり、養蜂を通して自然環境についてより一層興味関心を抱くようになりました。

近年、世界的な自然環境の変化は、養蜂にも深刻な影響を及ぼしていると言われています。この群馬県内でも、猛暑で巣が溶けてしまったり、長雨で流蜜期に蜜が採れなかったりして、温暖化の影響と思われる気候の変化を感じます。また全国的に見ると、熊やオオスズメバチといった天敵や、雄蜂の蜂児に多く寄生するミツバチヘギイタダニの増加による病気の蔓延もあったり、カメムシ大量発生への殺虫剤使用が原因で、蜜蜂が大量死する地域もあつたようです。自然環境の変化、生態系バランスの変化などは大きな枠組みでの対策が必要となりますが、個人ではなかなか対策できないもどかしさを感じています。



ニホンミツバチ
在来種



蜂の子を食べる

ヒヨコ

私個人としては、ミツバチヘギイタダニ対策の一環として、これまでは捨てられてしまっていた蜂の子を平飼いの鶏の餌として活用する試みも進めています。高タンパクな餌として鶏の健康や毛艶も良くなり、栄養価の高い卵の生産が出来るのではと考えています。こちらの標高400メートル弱の里山地域では、在来蜂の減少が見られ、近隣の農家が栽培する野菜や果樹の花粉交配にミツバチが役立っていると実感しています。また耕作放棄地に蜜源植物を植え、その菜葉を家畜の餌に利用し、更に堆肥を畑に還元するという循環型農業を目指しています。また昨年度から、はちみつに含まれる微量の花粉からDNAを解析し植物の生態系を把握したいという研究者に協力し、はちみつの提供を行っています。今後も、環境に配慮しつつ「持続可能な農業×養蜂」を目指して次世代に繋げていけたらと考えています。



楽しく学ぶ親子環境教室

前橋市 生きものたち庭ガーデンクラブ代表 井上金治

前橋市嶺町にある生きものたちの庭において、11月18日（日）および12月8日（日）の2回に分けて親子環境学習を行いました。

第一回は、海洋マイクロプラスチックなどの深刻なプラスチックゴミの問題について学びました（16名参加）。できるだけプラスチックに頼らない生活のために、ヘチマだわしを作りました。

第二回目は、化石燃料の使用により大気中の二酸化炭素が急激に増加し、気候変動などの大きな問題を引き起こしていることを学びました（19名参加）。このためには、太陽光などの自然エネルギーやバイオマスを利用することが求められています。この体験として、ソーラークッカーや、かまどで薪を炊いて焼き芋を作りました。この日は雲が出て大変寒い日でしたが、ソーラークッカーでホカホカの焼き芋ができました。両日とも、落ち葉で作った腐葉土で野菜苗をつくり、環境問題を楽しく学ぶことができました。



腐葉土で苗づくり



上州会議 2024 に参加して

高崎商科大学 田村彩紀

私たち上州ぐんま ESD 実践研究会（高崎商科大学萩原ゼミ）では、2024年12月14日（土）の午後、高崎商科大学にて「第7回 上州ぐんま市民環境保全活動発表会&交流会（上州会議 2024）～「ぐんま5つのゼロ宣言」と身近なことから始める ESD/環境 SDGs 活動～」を開催しました。

基調講演には京都からライフスタイル・コンサルタントとして活躍されている森孝之先生（大垣女子短期大学名誉教授）をお招きし、ご自身が長年実践されている半自給自足・循環型の生活について紹介していただきました。また、ポスター発表や口頭発表には環境アドバイザーの方々にも発表していただきました。



上州会議に参加した学生たちは「会社の社長だった人がこんなことをするなんて普通は思わないけど、やればできるんだ」、「群馬県内でこのような活動がされていたのは知らなかった」とか「身近なことは私もやってみようかな」などと話していました。

萩原ゼミの学生は全員が環境アドバイザーに登録をして、ゼミの活動を中心に環境保全活動に携わっています。今回の上州会議での基調講演や報告を聞いたことで、まだ私たちの活動の幅を広げることができることがわかりました。群馬県内で活動をされている方は他にもいらっしやると思いますので、もっと話を伺いチャンスがあれば、その方々と一緒に活動を展開していくことができれば嬉しいです。

【編集後記】

いつもたくさんのご協力ありがとうございます。今年も素敵な活動を紹介していきます。 広報委員長 酒井

GNの発行予定および問い合わせについて

グリーンニュース（GN）は年4回発行します。掲載したい原稿などございましたら下記にご連絡ください。

群馬県 環境政策課 環境政策係 環境サポートセンター 角張

〒371-8570 前橋市大手町一丁目1番1号

TEL 027-226-2827 FAX 027-223-0154 E-mail: kakubari-toshiaki@pref.gunma.lg.jp